『オリエント』第56巻第2号抜刷
2014年3月31日発行

エマルにおける自由人としての寡婦と離縁者
——*almattu-azibtu* 規定論——

山 田 雅 道

2 0 1 3

日本オリエント学会

エマルにおける自由人としての寡婦と離縁者

——*almattu-azibtu* 規定論——Widows and Divorcées as Free Women in Emar:
A Study of the *almattu-azibtu* Formula山田 雅道^{*}
YAMADA Masamichi

ABSTRACT This study deals with the *almattu-azibtu* formula, the enigmatic expression that a certain woman is *almattu itti almanāti azibtu itti azbāti*, “a widow with widows (and) a divorcée with divorcées,” which is attested in six Emar texts of Syro-Hittite type. Through an analysis of these texts, the following three features are particularly noteworthy: (1) the women concerned are free women; (2) but they are in a socio-economically inferior position; also (3) the above formula is stated in the context of the premise of (or, in five texts, at the time of) their marriage. From the last point, we may conclude that the meaning of the *almattu-azibtu* formula is that after the marriage ends, either by the death of the husband or divorce, the woman is to be treated like other normal widows or divorcées. Furthermore, we should note that this formula is used substantially to prescribe the release of a former slave in *Emar* VI 16. In another text, a free woman married to a slave (QVO 5-T 1) was, after his death, adopted by his owner, who presumably wanted to keep her under his control (QVO 5-T 2). From these points, we may understand the intention of the formula as prescribing that because they are free women, though in an inferior position, they shall not be treated as slaves. The same intention can be identified in the expression, *kīma mārāt Emar^{ki} šīt*, “because she is a daughter of Emar,” in *RE* 61, a text of Syrian type.

I. はじめに

エマル文書⁽¹⁾には、一部の女性に関し、彼女は *almattu itti almanāti azibtu itti azbāti* 「寡婦たちとともに寡婦、離縁者（すなわち離縁された女性）たちとともに離縁者である」という表現が散見される。旧稿において筆者は最近出版された QVO 5-T 1 に触れ、そこに見られる同表現⁽²⁾——以下 *almattu-azibtu* 規定と呼ぶ——を「自由人身分にありながら社会・経済的劣位者となった女性に関し、彼女の権利をむしろ擁護するための積極的な規定として理解する」との見解を示した（山田 2011, 119）。本稿においては、その論証を試みる。対象となる史料は結婚ないし養女縁組に関する私的契約文書であるが、この

* 中央大学文学部非常勤講師

Lecturer, Faculty of Letters, Chuo University

(1) 本稿で用いる文献略号に関しては、M. T. Roth (ed.), *The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago* 20: *U and W*, Chicago, 2010, vii-xxix 参照。ただしエマル、ヌジ文書の略号は以下の通り：*AASOR XVI*=Pfeiffer & Speiser 1936; *AuOr 5-T*=Arnaud 1987; *BLMJE*=Westenholz 2000; *Emar VI*=Arnaud 1985-86; *QVO 5-T*=Di Filippo 2010; *RAI 47-T*=Hallo 2002; *RE*=Beckman 1996; *Semitica 46-T*=Arnaud 1996; *SMEA 30-T*=Arnaud 1992; *TS*=Arnaud 1991.

(2) ただし QVO 5-T 1 では寡婦と離縁者の位置が逆転し、後者は *ezibtu/ezbēti* とアッカド語バビロニア方言形で表記される (*azibtu/azbāti* はアッシリア方言形)。また以下に見るように、表現の一部が省略される場合もある。下記 II 第 4 史料の項も参照。

種の契約が豊富なヌジ文書研究の成果も参照しつつ、議論を進めたい。

II. 史料

問題の *almattu-azibtu* 規定は、6 点のシリア・ヒッタイト型文書 (=H) に確認される。⁽³⁾ 本節で扱う順番とともに示せば、以下の通り：

<i>Emar</i> VI 16	4	QVO 5-T 1	1	<i>Semitica</i> 46-T 1	2
<i>Emar</i> VI 216	5	RAI 47-T 2	6	<i>SMEA</i> 30-T 13	3

〔第 1 史料〕既に触れた QVO 5-T 1 からテキストの検討を始めよう。本文部分を引用する。

(1) ^m*ku-na-²e* DUMU *ir-ri-g*[*e*] (2) ⁱ*an-na-ki-me* DUMU.MÍ ^m*x-^hi-^hir²*-[*x*] (3) LÚ URU.^ú*ri a-na* DAM-*ut-ti* (4) *ša* ^m*a-bi-SA-SI* ÌR-*šu* (5) *il-qe e-zi-ib-tu* (6) *it-ti e^z-be-ti ù al-ma-tu* (7) *it-ti al-ma-na-ti* / Irrig[*e*] の息子 Kuna^e は、ウルの人 X-^hir(?)-[*x*] の娘 Anna-kime を自分の奴隷 Abi-SASI の妻として取った。(彼女は)離縁者たちとともに離縁者、寡婦たちとともに寡婦である。

注

2 行：もしくは ^m*x-A*[*H*] か。父名の読みはハンドコピー (Di Filippo 2010, 114) に基づく。Cf. ^l*x-HI*-[*x-x*] (ibid., 106)。

簡潔すぎる契約証書であって、Anna-kime が結婚した途端に「離縁者」、「寡婦」と呼ばれるのも、いかなにも唐突かつ不吉である。この史料のみでは *almattu-azibtu* 規定が何を意味するのか明らかではない。父名をとまなう人名への言及から見て、Anna-kime は自由人であったと考えられるが、あろうことか奴隷の妻とされている。どのような女性ならそのような結婚が可能であろうか。通常の結婚には必要な花嫁料⁽⁵⁾の支払いが夫側からなされていない点も考慮に入れると、彼女は債務返済に失敗した父によって債権者 Kuna^e に引き渡された娘であろうと推定される。このことは、Kuna^e が彼女を「取った」という用語法によっても支持されよう。

QVO 5-T 2 (山田 2011参照) からは、その後 Abi-SASI が死亡したことが窺われる。ここで、寡婦となった Anna-kime が今や亡き夫の主人 Kuna^e の「娘」(3 行)と呼ばれている点に注目しておこう。この事実と *almattu-azibtu* 規定の間には何らかの関係があるものと期待されるが、この点については後述する (IV. 3)。なお、本文書において Kuna^e は、最終的に彼女を自分の *amilūtu* であった ^Hizmiya に嫁がせ、債務を免除した彼に自分たち夫妻の「世話」を委ねている。⁽⁶⁾

〔第 2 史料〕⁽⁷⁾*Semitica* 46-T 1 もまた短い文書である。その本文部分は以下の通り：

(1) ^m*a-^hu-qa-ru* DUMU *id-di-²ra* (2) *a-kán-na iq-bi um-ma-a* (3) ⁱ*ša-a-da* NIN-*ia* (4) *a-na* DAM ^m*na-i-⁴KUR* DUMU ⁴*KUR-a-bu* (5) *a-na* 90 GÍN KÙ.BABBAR NÌ.MÍ.ÚS.SA (6) *at-ta-din-ši-mi* MÍ.*al-ma-tu₁* *it-*

(3) もう 1 点、*Emar* VI 234 (断片) が加わる可能性がある：(2') [...] x [...] (3') [...] x *az-ba-a-t*[*i*]。ただしハンドコピー (Arnaud 1985-86/1, 212 [Msk 7480d]) を見る限り、*it-ti* *i az-ba-a-t*[*i*] と読むことは難しい。

(4) エマル近郊の町。Belmonte Marín 2001, 327f. (s.v. URU) 参照。

(5) 花嫁料 (*terhatu*) に関し、Westbrook 1988, 53ff. (特に 59f.), 99f.; 中田 2002², 125-128 参照。

(6) QVO 5-T 2 を含め、特殊な銀債務者 *amilūtu* による「世話」契約に関しては、山田 2012, 3-6 参照。

(7) アルノーによると、エマル近郊のテル・ファクウスで出土したが実物は消失したため、以下の翻字はその写真をもとに作成された暫定版 (Arnaud 1996, 8)。

ti al-ma-na-ti [(ši-it)] (7) ^dKUR-EN DUMU *gu-ra-nu* KÙ.BABBAR.MEŠ Ì.LÁ.E (8) *ur-ra-am še-ra-am*
(9) ŠEŠ *a-na* ŠEŠ *la-a i-ra-gu-um* (10) *ša i-ra-gu-um* (11) *ṭup-ṭu an-nu-ú i-la-e-šu* /

Iddi³-Ra の息子 Aḫu-qaru は以下のように言った、「私は我が姉妹 Šada を花嫁料銀90シクルで Dagan-abu の息子 Nai-Dagan の妻として与えた」。(彼女は)寡婦たちとともに寡婦である。Guranu の息子 Dagan-belu がその銀を支払う。将来、(誰も)お互いに権利を主張してはならない。権利を主張する者に関しては、この文書が彼に勝る。

注

1 行：粘土板の写真 (Arnaud 1996, Pl. 1) を見ると、-*qa-rù* DUMU とも読める。

5 行：写真を見ると、数字の部分は不鮮明ながら、縦棒 1 本と Winkelhaken 3 本を認めうる。

6 行：写真では *it-ti al-ma-* までははっきりと確認される。なお、*almattu-azibtu* 規定には *šil* を伴う場合 (*Emar VI* 216: 12; *SMEA* 30-T 13: 6f.) と伴わない場合 (*Emar VI* 16, *QVO* 5-T 1, *RAI* 47-T 2) の 2 通りがある。

一見、売買契約を思わせる文面であるが、結婚契約には違いない。ここでは *almattu-azibtu* 規定の前半部のみが記される (おそらくその略記であろう)。Šada がその兄弟によって嫁がされたのは、彼らの両親が既に死亡していたからと考えられる。この婚姻には、しかし、明らかに異例な特徴が 3 点認められる。

第一に、花嫁料を花婿(の親)ではなく別人が支払う点である。これはどのような事情によるのであろうか。9 行の禁止規定は、「誰」が「何」に対して権利を主張してはならないかを具体的に示さない。契約に関わる 3 者全員がこの決定に対しいかなる異議を唱えることも禁じる、という意図によるのであろう。例えば銀に関しては、Aḫu-qaru が Nai-Dagan に対し支払いを要求したり、Dagan-belu が Aḫu-qaru (と Nai-Dagan) に対し支払いを拒否できないということである。この場合、支払いを強制された Dagan-belu の人物像に関し最も可能性が高いのは、Nai-Dagan の債務者であろう。⁽⁸⁾ アルノー (Arnaud 1996, 10) とともに筆者は、この婚姻における花嫁料の支払いは Dagan-belu の債務返済をもって代えられたと考える。

第二に、花嫁料が結婚後に支払われる点である。しかもその期限が設定されておらず、Dagan-belu が本当に花嫁料を支払うという保証もない。その意味でこの結婚契約は、Aḫu-qaru にとって大きなリスクを抱えていると言える。

第三に、銀90シクル (5 行) と比較的高額な花嫁料が設定された点である。この点はハイ・リスクに対するハイ・リターンとして理解されよう。すなわち Aḫu-qaru にとって姉妹の結婚は、一攫千金の機会となっている。

ここから浮かび上がる Aḫu-qaru の人物像とは、いかなるものであろうか。この結婚契約に対する彼の関わり方の違いによって、以下の二つの可能性が考えられよう。

(1) Nai-Dagan に対する従属者：Nai-Dagan によって、花嫁料の支払い未定という不利な条件での婚姻を強いられた受動的関与の場合。具体的にどのような従属関係にあるかは不明ながら、これほど弱い立場であれば、経済的にも当然困窮していたであろう。そうした人物に対し、7 行の規定は過酷であると言わざるをえない (cf. 上記特徴第二点)。

(8) 任意の資金提供者はこの規定になじまない。そもそも Nai-Dagan が Dagan-belu に花嫁料の銀を借りる場合、それを Aḫu-qaru に支払うとされるのは、前者であって後者ではなかろう。

(9) 以下に見るように、*almattu-azibtu* 規定が現れる他の文書中、結婚の際に支払われる銀 (花嫁料) の額が知られる場合、それは 30 (cf. *Emar VI* 216) ないし 20 シクル (*RAI* 47-T 2) にとどまる。

(2) 重度の貧窮者：結婚成立に際し、Nai-Dagan から Dagan-belu に対する(不良?)債権を引き継ぎ、銀90シクルを自ら取り立てに行く能動的関与の場合。そのような彼にとって、7行に花嫁料支払いの期限が設定されないのは、むしろ好都合である。しかし自分の姉妹の結婚を投機の対象とするなど、健全なエマル市民の行うことではあるまい。一種の無頼漢とも考えられるが、彼が経済的に深刻な困窮状態にあったとすれば、やむにやまれぬ行為として理解することが可能となろう。

7行の規定との親和性という点で(2)の解釈の方が合理的と思われるが、いずれにせよ Ahu-qaru が普通の自由人でないことだけは確かであろう。上記したアルノーの理解に従えば、彼は社会・経済的な劣位者と推測される。

〔第3史料〕私見によると、前2史料と同様、「妻」への言及が裁判文書 SMEA 30-T 13にも認められる。本文部分は以下の通り：

(1) *a-na pa-ni* ^m*mu-ud-ri*-^d[IM]-*ub* (2) ^m*ki-i*[*t-ta*] x [(x)] x-*mu*-³L[Ú] URU.eš-*ši* (3) *it-ti* [^mx x]-³[*a*]-*hi* [³*a*]-*na* DI.KU₅ *ši*¹-*bu-ti za-ru-tu₄* *i*(sic)-*še-zi-iz* (4) *iš-ni*-³[*qu*]-*ma*-[*a* ³SI]G₅-*ma-at-DINGIR-lì* MÍ.ÌR-*ia* (5) *in*¹-*na-ap*-[*š*]*a* DAM ^m[x x x (x)] *ši-it* (6) *al-ma-tu₄* *it-ti al-ma-na-ti* *ši*-³[*it*]-*m*[*a*² *a-z*]-³[*ib*]-*tu₄* (7) *it-ti a-za*(sic)-*ba-t*[*u₄*] *ši*-[*i*]*t* /

(8) *šum-ma ur-ra*-³[*am*] (9) *še*-³[*ra*]-*am a-n*[*a* ^m*ki-it-ta*] (10) *i-qáb-bi m*[*a-a* MÍ.ÌR²-*ia*] (11) *ši-it* [*tu*]*p*-[*p*]*u* [*an-nu-ú*] (12) *i-la-i*-³[*šu*] /

Mudri-Tešub の前に、エッシュの人 [...]... Ki[tta] は家族の証人たちを出廷させ、[X]-*ahi* とともに裁判に臨んで(言った)、「我が女奴隷 [Na] ³mat-ili は摘み取ら[れ]た。彼女は [PN] の妻である」と。彼女は(寡婦たちとともに)寡婦、彼[女]は離縁者た[ち]とともに[離]縁者である。

もし将来、彼 (X-*ahi*) が [Kitta] に対[し]「彼女は[我が女奴隷(?)である]」と言っても、[この文]書が彼に勝る。

注

1-4行：裁判文書冒頭の定型表現 *ana pāni* PN PN2 *itti* PN3 *ana dīni išniqū* (cf. Yamada 2007, 794 n. 15) の途中に、*šibūti za/ārūtu išēziz* が挿入されたと理解する。

2行：L[Ú] はハンドコピー (Arnaud 1992, 240) に基づく筆者の提案。Cf. ³-*hi* uru (ibid., 218)。

3行：*za-ru-tu₄* の解釈に関しては、アルノー (ibid., 219) に従う。ただしその前の *šibūti* とは格語尾が異なる。

4行：通常の GÉME「女奴隷」に対応する表記として MÍ.ÌR「女・奴隷」が使用されている (ibid.)。管見の限りで、この例外的な表記例は他に女性人名 Amat-ili の表記 ³mMÍ.ÌR-DINGIR-lì (*AuOr* 5-T 9: 7, 8, 17) に確認されるにとどまる。

5行：動詞の読みはハンドコピーに基づく筆者の提案。ここでは比喩的に用いられていると考えられる。この *napāšu* は通常「(羊毛を)梳る、抜く」の意味で使用者が、NA に「バラ／キイチゴを摘み取る」の用例 (BA 2, 633, 15=Craig ABRT 1 26 r. 1) が認められる (*AHW*, 737a [s.v. *napāšu*(*m*) II, G, mng. 2]; *CAD* A/2, 91a [s.v. *amurdinnu*, mng. 1c] 参照)。Cf. *dumu.mí-ut-ta ša dam* (Arnaud 1992, 218)。筆者がアルノーの読みを支持しない理由として、以下の問題点を指摘したい。第一に、ハンドコピーを見る限り TA とは読めず (cf. 16行)、MÍ も疑問(縦棒欠如)であること。第二に、本人も認めているように (ibid., 219)、Na³mat-ili を主語とする名詞文 (4b-5行) の補語が *mārtutta* と抽象名詞 (しかも対格形) となり、文法的に無理があること、である。

6行：Cf. *ši-it* [*a*]*l*-[*m*]*a-tu₄* (ibid.)。

10行：破損部の復元候補は他に、我が DUMU.MÍ「娘」、DAM「妻」など。ただし DAM に関しては、9行破損部に5行の PN (破損) を復元することも可能。この場合、X-*ahi* は彼の恋敵であったということになろうか。Cf. *l*[*a-a al-ma-tu₄*] (ibid.)。

Na³mat-ili の元々の身分ないし地位が何であれ、本文書において彼女は Kitta の女奴隷であることが

(10) すなわちエマル近郊の「新町」(Newtown)。Belmonte Marín 2001, 76 (s.v. *EŠŠU 2) 参照。

確認され、彼は彼女を(奴隷身分から解放して) PN (破損) の妻としている。*almattu-azibtu* 規定(一部省略)はこれに付される。また Na⁶mat-ili が女奴隷であったことから、筆者はこの婚姻を実質的な人身売買ではないかと疑うが、いずれにせよ花嫁料の問題は扱われていない。*SMEA* 30-T 13 は正式な結婚契約書ではなく、彼女の帰属 (Kitta → [PN]) を確定させた裁判文書であるため、支払いはなされたがその事実を書く必要がなかったのだと理解される。

〔第4史料〕同じく「妻」への言及は、Šaggar-abu が自分の *amīlūtu* であった Bazila と結んだ「世話」契約 *Emar* VI 16 にも認められる。⁽¹¹⁾ その主契約部分 (1-12, 特に 1-9a 行) では、債権者 Šaggar-abu が Bazila の債務、銀41シクルのうち20シクルを免除し、Abi-qiri なる女性を「妻」(4行)として与える(花嫁料への言及はない)代わりに、Bazila は債権者夫妻の世話をする義務を負うと定められている。彼らが死んだ後、彼は妻子とともに債権者宅からの退去＝解放を許されるが、その際、債務残高21シクルを夫妻の息子たちに支払わなければならない。これに続いて、将来想定される事態に備えた四つの付則が記される。その事態とは、Šaggar-abu による契約違反 (13-16行)、Bazila による契約違反 (17-21行)、Bazila の死亡 (22-29行)、その妻 Abi-qiri の死亡 (30-36行)である。*almattu-azibtu* 規定は、第三の付則に見られる。

(22) 「šum¹-ma i-na EGIR u₄-mi m^{ba}-zi-la BA.ÚŠ^f a¹-bi-qí-ri (23) 「DAM¹-šú u₄-mi.MEŠ ša^{md}30-a-
「bu¹ ù DAM-šú bal-šu (24) i-pal-làh-šú-[n]u-ti «ki¹-[i-me-e] i-p[al-là]h-šú-nu-ti (25) EGIR ši-im-ti-šú-nu
「ub-bal¹-šú-nu-ti [a]-na EGIR u₄-mi (26) «a-bi-qí-ri al-ma-tu₄ «it¹-ti a[t-m]a-[n]a-ti [a-zí]-ib-tu₄ (27) it-ti
az-ba-ti [D]UMU.MEŠ-šú š[a]^{md}30-a-bi «a-na muh¹-hi-«ší (28) la-a i-ra-gu-mu š[ú]m-ma «i¹-ra-gu-
mu tu¹-pu an-nu-«ú (29) i-la²-e-šú-nu-ti /

もし今後 Bazila が死んだならば、その妻 Abi-qiri が、Šaggar-abu とその妻が生きている間、彼らに仕える。彼女が彼らに仕[え]る場[合]、彼女は彼らの運命の後へ彼らを運ぶ。⁽¹²⁾ [そ]の後、Abi-qiri は寡[婦]たちとともに寡婦、離縁者たちとともに[離]縁者である。Šaggar-abu の息子たちは彼女に対し権利を主張してはならない。もし彼らが権利を主張しても、この文書が彼らに勝る。

現実的に離縁者とはなりえない状況においても *almattu-azibtu* 規定が完全な形で使用されている。この事実は、「寡婦」と「離縁者」が同等と見なされていることを示す。だとすれば両者の位置が逆転しても (QVO 5-T 1)、表現の一部が省略されても (*Semitica* 46-T 1, *SMEA* 30-T 13)、全体として言わんとすることに変わりはないことになる。

ここで問題は、夫妻の死後、Abi-qiri が実際にどう処遇されるのかという点である。筆者は前稿 (2012, 4 の表 1 注 a) において彼女を Šaggar-abu の女奴隷と見なす可能性を示したが、この点は引用テキスト中の禁止命令 (27b-28a 行) から支持される。同じ *ana muh¹hi X lā iraggumū* は奴隷による「世話」契約 (ibid., 5f. 参照) においても認められ、そこでは義務終了後、主人宅から解放される奴隷 (=X) に対し、主人の息子たちが相続権を主張することを禁じた規定として用いられているからである (*Emar* VI 177: 22'; *RE* 27: 6f. [息子 1 人]; 66: 9b-10)。Emar VI 16 においても同様の意味をもつものと解されなければならない。これらの文書においてこの禁止命令は、その直前の規定を受けた結論(も

(11) 「世話」契約を扱った拙稿 (山田 2012) 中、*Emar* VI 16 は pp. 4f., 18 (9b-12行について) で扱われている。

(12) すなわち夫妻の最期を看取り、埋葬する。ただし夫妻には息子たちがいるので、埋葬儀礼は彼らが行うのかもしれない。

しくは同義的な言い換え)と見なされる。その規定とは、*Emar* VI 16 では *almattu-azibtu* 規定 (26-27a 行)、例えば *Emar* VI 177 (山田 2012, 6f. に引用) では PN *ana šamši muššur* 「PN (奴隷) は太陽に解放される」(21^b 行) である。両者の並行性は明らかであることから、実質的に *almattu-azibtu* 規定は、⁽¹³⁾ 元女奴隷 Abi-qiri の旧主人宅からの退去＝解放(実現)を認めた規定として理解されることになる。

さて、息子たちが要求を禁じられるのが Abi-qiri 本人だとすると、債務残高の支払いはどうなるのか。ここで指摘すべきは、本来「世話」義務を負っていたのは Bazila であって、彼女ではないという事実である。夫の死後、彼女は新たに Šaggar-abu 夫妻の「世話」を引き受ける代わり、義務終了後に支払いなしで夫の債権者宅からの退去が認められる、すなわち両者は相殺されるのであろう。

〔第5史料〕「妻」と並んで「娘」すなわち養女への言及が見られるのが *Emar* VI 216 である。その主契約部分を見てみよう。

(1) ¹*ku*-²*e* DUMU.MÍ ^m*zu*-[...] (2) DAM ^m*za-dam-ma* [*a-kán-na iq-bi*] (3) *ma-a* LÚ.*mu-ti*-⁴*ia* ¹*il-t*[*a-bi-ir* DUMU.MEŠ-*ni*] (4) *še-eh-ru ša ú-bal-la-aṭ-s*[*ú-nu* NU.TUK] (5) ¹*ù* ¹*NIN-be-a* DUMU.MÍ-*ia a-na* ¹*KÙ*.[BABBAR(.MEŠ)] (6) *a-na* DUMU.MÍ-*ša ša* ¹*a-nat-um-mi* DAM ^m*še*-¹*gal* DUMU *ik-ki* (7) *at-ta-din-ši* DUMU.MEŠ *še-eh-ru-ti i-na* MU *dan-na-ti* (8) *ú-bal-li-iṭ šúm-ma* ¹*a-nat-um-mi* DAM ^m*še-gal* (9) *la¹ tu-la-ad* ¹*NIN-be-a a-na* DAM-*šú ša* ^m*še-gal* (10) LÚ.*mu-ti*-*ša ta-na-din-ši i-na* EGIR *u¹-mi* (11) ¹*NIN-be-a al-mat-tu⁴ it-ti al-ma-na-ti* (12) *ši-it a-zi-ib-tu it-ti az-ba-ti¹ ši-it* (13) ¹*ù* [¹*šúm*]-*ma* ¹*a-nat-um-mi i-na* ^m*še-gal* (14) LÚ.¹*mu*[-*ti*-*ša tu-la-ad* (15) [^m]-*še-g[al]* ¹*ù* ¹*a-nat-um-mi* (16) [¹]^d[*NIN-b*]-*e-a* DUMU. MÍ-*šú-nu i-na* É-*e-mi* (17) *li-d*[*in-nu*]? KÙ.BABBAR.MEŠ NÌ.MÍ.ÚS.¹*SÁ*]-*ši* (18) *lil*[-*q*]*u²-ú* Zu-[...] の娘にして Zadamma の妻 Ku^e は[以下のように言った]、「私の夫は年[老い]、私たちの息子たちは[まだ]幼く、彼[らを]扶養する者は[いない]。そこで私は私の娘 Ba¹la-bea を、銀で Ikki の息子 Šegal の妻 Anat-ummi の娘として与えた。私は苦難(すなわち飢饉)の年に幼い息子たちを扶養した」と。もし Šegal の妻 Anat-ummi が(子を)産まないならば、彼女は Ba¹la-bea を彼女の夫 Šegal の妻として与える。その後、Ba¹la-bea は寡婦たちとともに寡婦、離縁者たちとともに離縁者である。もし Anat-ummi が彼女の夫 Šegal のために(子を)産むならば、Šeg[al] と Anat-ummi は彼らの娘 [Ba¹la-b]ea を他家に嫁が[せ](直訳：義理の父の家に与え)、彼女の花嫁料の銀を取[る]べし。

注

3-4 行：破損部の復元は、コレイションに基づくデュランとマルティの読み (Durand & Marti 2003, 180) に基本的に従う。ハンドコピー (Arnaud 1985-86/1, 145f.) を見ると、*il¹-ta-pa-a*[*l(-ma)*]「損失を被り」との読みが一応可能と思われるが、動詞 *šapālu* G の語幹母音は *i/i* であって *a/u* ないし *a/a* ではない点が問題となる。なお、4 行の復元は従属符 (subjunctive) -*u* を欠くものの、ハンドコピーによると -*aṭ-t*[*ú-šu-nu*] と読むのは難しい。

5 行：筆者の「KÙ.[BABBAR(.MEŠ)]」という読みはハンドコピーに基づく (cf. 17, 20行)。Cf. *š[ám]* (Arnaud 1985-86/3, 230); *ma¹-ar¹[-tu-ti]* (Durand & Marti 2003, ibid.); *é¹.[gi.a ú]* (Justel 2008, 6 n. 27, 14)。コレイションによるとはいえ、デュランとマルティの読みは 6 行冒頭と重複するため、筆者には疑わしく思われる。

17行：もしくは *li-d*[*i¹-nu*] か。ハンドコピーを見る限り、破損部には *li-i*[*d-di-nu*] と補えるだけのスペースがな

(13) おそらく Abi-qiri は、法的には結婚時に奴隷身分から解放されていたと考えられる。Šaggar-abu の支配下にあるとはいえ夫は自由人 (*amīlūtu*) であり、結婚後 2 人の「主人」をもつ状況が想定しにくいからである。ただしその解放が旧主人宅からの退去という形で名実ともに実現するのは、「世話」義務の終了後となる。

(14) ここで Ba¹la-bea が Šegal の娘とされないのは、彼の娘とすると、Ba¹la-bea が彼の側妻となった場合、彼は法的に近親相姦を犯すことになるからである。しかし妻の養女であればかまわないと見える。夫の娘にはできなくとも Anat-ummi の娘としたのは、Ba¹la-bea を支配下に置き、彼女を他家に嫁がせる際の権利を得るために必要だからであろう。

い。

この養女縁組契約はその後破棄され、*Emar VI 217* においてシャタップ⁽¹⁵⁾の人（1行）Zadamma とその妻 Ku³e は、Ba³la-bea を含む息子2人と娘2人（うち1人は乳児⁽¹⁶⁾）を銀60シクルで卜占師 IM-malik に奴隷として売却することになる。この文書中、旧養女縁組契約（*Emar VI 216*）に関しては以下のよう

(11) *ù a-nu-ma ku³-e pa-na-nu ba-la-be-a DUMU.MÍ-ši* (12) *a-na 30 KÙ.BABBAR.MEŠ a-na MÍ.É. GI.4.A.MEŠ a-na a-nat-um-mi i-din* (13) *ù tuḫ-pa e-te-ep-šu-ma a-nat-um-mi 30 KÙ.BABBAR.MEŠ* (14) *ŠAM ba³-la-be-a la-a i-din*

さて、Ku³e はかつて自分の娘 Ba³la-bea を銀30(シクル)で嫁として Anat-ummi に与えた。その(契約)文書は作成されたが、Anat-ummi は Ba³la-bea の代金(直訳: 価格)銀30(シクル)を与えなかった。

娘の「代金」。この衝撃的な一語は、以前の契約が実質的に人身売買であったことを端的に示す。引用した二つのテキストを比べると、*Emar VI 216: 8* の動詞 *uballit* (*balātu* D 1/3.c.sg.) の主語を拙訳のように「私」と取る場合、実際には銀30シクルが支払われなかった(*Emar VI 217: 13f.*) のであるから、既に困窮していた Ku³e がいかにして息子たちを養育できたのが問題となろう。ここで注目すべきは、筆者の読みが正しければ *Emar VI 216* には「銀」(5行)とのみあって、その額が記されていない点である。彼女は Anat-ummi から30シクルのうち一部を受け取ったが、全額は受け取らなかったのだと筆者は考える⁽¹⁷⁾。

さて *Emar VI 217: 12* では「嫁」(*Emar VI 126: 6* では「娘」⁽¹⁸⁾)と称されているが、Ba³la-bea は Šegal 夫妻の息子の妻に予定されていたのではない。*Emar VI 126* によると、正妻 Anat-ummi の出産(特に息子であろう)の有無によって Ba³la-bea の運命は二つに分かれる: (1) 不妊ならばその夫 Šegal の側妻(8b-10a 行)、(2) 出産すれば他家の者との結婚(13-17a 行)。*almattu-azibtu* 規定(10b-12行)は前者の場合に付されている。このような特徴を備えた契約は、ヌジをはじめ古バビロニア、エマルを含む後期青銅器時代のシリアで確認され、「結婚養女縁組」(matrimonial adoption)——ある(若い)女性がその父ないし法的管理者(=A)の権威下から別の人物(=B)の権威下に移り、この者が彼女をさらに別の人物(=C)と結婚させるという法的事象——と呼ばれる⁽¹⁹⁾。

(15) これもエマル近郊の町。Belmonte Marín 2001, 267 (s.v. *ŠATAPPU) 参照。

(16) 彼らのうち3人分の足形(粘土に足を押しつけた跡)が出土しているが(*Emar VI 218-220*)、足の大きさは Ba³la-bea のもの (no. 218=Msk 74340) が最大で、約12.5cm (Adamthwaite 2001, 142)。粘土から水分が抜けて多少縮んだとしても、彼女はまだほんの少女だったのである。

(17) 文法的には Ba³la-bea を *uballit* の主語と見ることも可能である。しかしその場合、他家の養女となった彼女がどうして実家の兄弟たちを扶養できたのか、大いに疑問となろう。もっともそのような彼女の非常識な行動が本養女縁組の解消を招いたとの説明は可能ながら、筆者は採らない。

(18) 両語の交替は、ともに「義理の娘」という要素を共有することから了解可能である。

(19) 先行研究の概観を含め Justel 2008, 1-4; また Westbrook 1988, 38f. を参照。ヌジにおいてこの種の契約は *ṭuppi mārūtū u kallatūtū* に典型的に現れるが、*ṭuppi mārūtū* と *ṭuppi kallatūtū* 中にも認められる (*mārūtū* は *mārtu* 「娘」の、*kallatūtū* [*kallūtu*] は *kallātu* 「嫁」の、それぞれ抽象名詞)。Grosz 1987, 133, 137, 143-150 参照。フステルは5点のエマル文書 (*Emar VI 216*; *RE 6*, 61, 76; *RAI 47-T 2*) を結婚養女縁組と見なす (ibid., 特に 4f., 7, 18f.)。上記の定義に照らせば、この判断は妥当であろう。しかしここで指摘すべきは、Dadi 夫妻 (A) が娘 Imut-tabari を Uginu (B) の「嫁」=自分の息子 (C) の妻として与え、彼女が舅の世話をすることを定めた文書 *RE 6* の特殊性である。結婚相手の C に関し、他の4文書では B とは別の家の者が候補者に入っている (*RE 61* における Na³mi-šada の結婚については下記注30参照) のに対し、ここではその可能性が全く想定されていない。その意味で *RE 6*

Ba^lla-bea に対する処遇に選択肢が存在すること自体から、Šegal 夫妻側が優位な立場にあることは明らかであろう。Ba^lla-bea が経済的に困窮した自由人の娘であったことは疑いえないが、Šegal との結婚後も正妻(かつ養母)の支配下に置かれることは明白である。元女奴隷の事例 (Emar VI 16) とは状況が異なるものの、Emar VI 126 においても社会・経済的な劣位者と *almattu-azibtu* 規定の強い結びつきを確認することができる。

〔第 6 史料〕前史料と同様、結婚養女縁組契約に分類されるのが、「嫁」に言及する RAI 47-T 2 である。その本文部分を以下に引用する。

(1) ^{fd}KUR-si-me-er-ti DAM ^{md}U-EN KI ^lip-q^l ^dKUR (2) DUMU a-a ^{fd}NIN-ki-me DUMU.MÍ-ši (3) a-na 20 GÍN KÙ.BABBAR.ME a-na MÍ.É.GI₄.HÁ (4) ša ^mar-wi DUMU a-wi-rù it-ta-din-ši (5) al-ma-tu₄ it-ti al-ma-na-ti (6) a-zi-ib-tu₄ it-ti az-ba-ti (7) šúm-ma ^mar-wu ^{fd}NIN-ki-me a-na DUMU-šu (8) ul i-na-din a-na É e-mi li-din-ši (9) KÙ.BABBAR NÌ.MÍ.ÚS.SÁ-ši lil-qè /

(10) ^mzu-aš-tar-ti DUMU a-pí-la it-ti (11) ^{fd}KUR-si-me-er-ti a-na DI.KU₅ (12) iš-ni-qu ù ^{fd}KUR-si-me-er-ti (13) ^mzu-aš-tar-ti iš-tu DI.KU₅ il-te-^l ^laš-ši^l (14) ^lù DUMU.MÍ ša-a-ši ^mzu-aš-tar-ti (15) i[l-f]a-qè ù ^mar-wu (16) [20(±?) GÍN] KÙ.BABBAR.ME a-na ^mzu-aš-tar-ti (17) i[d-din]-ma ^{fd}NIN-ki-me (18) il-ta-qa-a /

^dU-belu の妻 Dagan-simerti は、Aya の息子 Ipqi-Dagan (のもと) から自分の娘 Ba^lla-kime を(取り)、⁽²⁰⁾ 銀20シクルで Arwu の息子 Arwu の嫁として彼女を与えた。(彼女は)寡婦たちとともに寡婦、離縁者たちとともに離縁者である。もし Arwu が Ba^lla-kime を彼の息子に与えないならば、彼女を他家に嫁がせ、彼女の花嫁料の銀を取るべし。

(その後) Apilla の息子 Zu-Aštarti は Dagan-simerti とともに裁判に臨んだ。そこで Dagan-simerti に関し、Zu-Aštarti は裁判において彼女に勝訴した。その娘を Zu-Aštarti が取[っ]た(ので)、Arwu は Zu-Aštarti に対し銀[20(±?)シクル]を与[え]、Ba^lla-kime を取った。

注

3 行：もしくは MÍ.É.GI₄.HÍ.A か。Cf. a-na MÍ.É.GI₄.A.MEŠ (=kallūti) (Emar VI 217: 12).

12-13行：ハンドコピー (Hallo 2002, 210) に基づく筆者の提案。Cf. ù² ^{fd}KUR-si-me-er-ti a-na «AŠ» (13) ^lZu-aš-tar-ti iš-tu DI.KURU₅ il-f[e-e] (ibid., 211)。しかしハローの読みでは Dagan-simerti が Zu-Aštarti に勝訴したことになり (ibid., 212)、その後 Arwu が Zu-Aštarti に対し銀を支払って Ba^lla-kime を得たことと矛盾する。

15行：行頭部の文字の痕跡を見ると [ul i-l]e-qì (ibid., 211) とは読みがたい。

第二段落までを考慮に入れると、このテキストはいささか理解困難となる。しかし第一段落に話を限れば、Dagan-simerti が娘を Arwu の嫁として与えた後、彼女の運命は二つに分かれる：(1) 彼の息子との結婚 (Ø)、さもないと (2) 他家の者との結婚 (7-8 行)。*almattu-azibtu* 規定 (5-6 行) は前者の⁽²¹⁾

は、文字通り「嫁」取りの文書と見なすことができる。

(20) 彼の家に関係する文書は TS 20-26 にまとめられている。これらと共通する以下の人物を考慮すると、本史料もその 1 点である可能性が高い：捺印者 Izkur-Dagan の息子 Dagan-tali³ (21-22行 vs. TS 23: 19f.), 書記 Šaggar-abu (23行 vs. TS 24: 25; cf. 22: 22)。

(21) Arwu が Ba^lla-kime を嫁とするため、Zu-Aštarti に銀を支払った後から出発すると、Zu-Aštarti は彼女に対する完全な支配権を有していたことになる。すなわち Ba^lla-kime は彼の養女か女奴隷のいずれかである。しかし何故彼女は Ipqi-Dagan のもとにいたのか。もちろん彼が Dagan-simerti から娘 Ba^lla-kime を女奴隷や債務の質として取っていたとは考えがたい。第二段落における決定に対し、彼は異議を唱えていないからである。彼女は、例えば Zu-Aštarti によって奉公に出されていたのかもしれない。そこを実母 Dagan-simerti が彼女を連れ去り、事情を知らない Arwu の嫁としたというのであれば話は一応通るが、およそ実証性を欠くことはもちろんである。

場合に付されている。*Emar VI 216* におけると同様、Ba⁶la-kime に対する処遇に選択肢が存在することから、この契約は Arwu 優位と見なしてよからう。

Ba⁶la-kime の境遇に関しては、彼女が Ipqi-Dagan のもとにいた点、後に Zu-Aštarti が彼女に対する支配権をもつことが判明した点から判断して、何か複雑な事情のある家の娘であったことは確実である。多数の結婚養女縁組文書が認められるヌジにおいて、通常、この種の契約を結ぶ花嫁側は経済的に困窮した自由人であったことが知られている (Grosz 1987, 147-149)。上記 *Emar VI 216* はまさにその好例である。数は少ないものの、この種の契約に関し、エマルにおいても同様の状況を想定できよう (cf. Justel 2008, 7)。Ba⁶la-kime の実母が結婚詐欺まがいの行為におよんだのも、おそらくは窮乏した生活に耐えかねた結果であったと考えられる。

III. 考察 1：規定の意味

これまでの史料検討の結果をまとめてみよう。*almattu-azibtu* 規定に関しては以下の特徴を指摘する。

(1) 全て自由人女性に関わる。特に *Emar VI 16* では、(奴隷との対比において)自由人身分への解放(実現)を意味する表現として用いられている。

(2) ただし彼女たち全員が社会・経済的に劣位な立場に置かれていた。すなわち元女奴隷 (*Emar VI 16*, *SMEA 30-T 13*) と経済的困窮者(と思われる人物)の娘 (*Emar VI 216*, *QVO 5-T 1*, *RAI 47-T 2*) である。また *Semitica 46-T 1* に関しても、おそらく社会・経済的な劣位者の姉妹と考えることができる。

(3) 全 6 人中半数の女性はエマル近郊の町々の出身者である：ウル (*QVO 5-T 1*)、シャタップ (*Emar VI 216* に関し cf. 217: 1; 218: 4)、エッシュ (*SMEA 30-T 13*)。また *Semitica 46-T 1* はテル・ファクス出土であった。

(4) 同規定は 6 点中 5 点の文書において彼女たちの結婚に際して付されている。残る 1 点 (*Emar VI 16*) では、亡き夫に代わって引き受けた「世話」義務の終了に際して付される。

特徴 (1)–(2) は、これらの女性がエマル自由人社会の周縁部(底辺)に属する人々であったことを示す。特徴 (3) は、この周縁性が空間的に表現されたものとして理解可能であろう。たしかにエマル王国全体としてみた場合、中心のエマル市に対し周辺部は相対的に貧しかったであろうと想像される。ただしこの点は *almattu-azibtu* 規定の理解にとって本質的に重要であるとは思われない。エマル市出身者の中にも上記周縁部に属する人々はいたはずだからである。これに対し、特徴 (4) は決定的な重要性をもつと考えられる。

almattu-azibtu 規定とは何かという問題に関し、そもそも何故「寡婦」と「離縁者」が言及されるのかを考えてみよう。同規定が結婚に際して用いられた 5 点 (*Emar VI 216*, *QVO 5-T 1*, *RAI 47-T 2*, *Semitica 46-T 1*, *SMEA 30-T 13*) では、その趣旨は明らかである。ここで夫の視点から妻を見れば、彼女の将来の地位は以下の三つに分類される点に注目したい：(A) 妻 — 夫が存命で結婚関係を継続する場合；(B) 寡婦 — 夫が先に死亡する場合；(C) 離縁者 — 夫が結婚関係を解消する場合。結婚に際した後 2 者が言及されるとは、妻の将来が主題であることを意味する。ならば *almattu-azibtu* 規定とは、妻が寡婦となったり離縁された場合の一般規定——他の寡婦や離縁者たちと同様に扱われる——と考えることができよう。⁽²²⁾ それでは「妻」についての文言が何故ないのか。夫が活着している間は、さまざまな場面で彼自身が正しい対処を行う(と男性中心的な社会では期待される)ので、不必要だからである。

ここで、残る *Emar VI 16* においても Abi-qiri が Bazila の妻となっていた事実を思い起こそう。そもそも「世話」義務終了後、Šaggar-abu 宅から解放されるこの元女奴隷は、一体どこに行くのであろうか。単純に彼女が誰の「寡婦」であったかを考えてみればよい。夫 Bazila の、である。だとすれば彼女が向かうべき場所はただ一つ、夫の実家に他ならない。⁽²³⁾そこで彼女は通常の寡婦や離縁者たちと同様に扱われることになる。しかし今や Bazila は死亡しているのに、彼女はそこで受け入れてもらえるのだろうか。「世話」契約 *Emar VI 16* は夫の生前に結ばれており、法的には全く問題なかろう（もっともその後、彼女には厳しい現実生活が待ち受けていることは想像するに難くないのであるが）。ここでも *almattu-azibtu* 規定が結婚を前提とする点は疑いえない。ただし Abi-qiri の場合は、夫の死後に債務残高の支払いに代わる「世話」義務を引き受けたため、その発効が義務終了まで延期されたのだと理解される。

以上の議論に基づき、上記特徴（4）は次のように改訂されよう。

（4'）同規定は全て彼女たちの結婚を前提として付されている。特に 6 点中 5 点の文書では、結婚に際してその記載が見られる。

この場合、その趣旨もまた全てに共通すると考えると、*almattu-azibtu* 規定とは、社会・経済的に劣位な立場に置かれていた自由人女性が結婚する際に、その後夫に先立たれたり離縁された場合、通常の寡婦や離縁者たちと同様に扱われるべきことを定めた規定であると、一応理解される。

この規定に関しフステルは、当該の女性たちに対して「寡婦や離縁者に固有の法的自立性」、すなわち債務や奴隷化請求を免除された「特別な法的地位」が付与されているとする（Justel 2008, 8 n. 37; 2009, 10）。しかし、ここで（息子のない）寡婦や離縁者が孤児と並ぶ社会的弱者の代表例であることを想起すれば、彼女たちへの言及自体に何か積極的な意味が込められているとは筆者には思われない。そこで次節では、エマルにおいて寡婦や離縁者が具体的にどう処遇されるかを簡単に見た上で、改めて *almattu-azibtu* 規定の意図する旨を考えたい。

IV. 考察 2：規定の意図

1. 寡婦の処遇

夫亡き後、残された妻の生活の面倒をみるのは、遺産相続者たる息子たち（特に長子）の当然の義務である。しかし彼らが皆その義務を果たすとは限らないことも論を待たない。エマル文書には、そのような危険に対して妻＝寡婦の生活を確保するために、夫が生前にその対処策を講じておく場合が認められる。

第一は、自身の死後、妻を家の「父にして母」(*abu u ummu*)⁽²⁴⁾ すなわち管理者となるべく任命する場合である。例えば *Emar VI 15* (S＝シリア型) と *TS 41* (H) に見られるように、母の存命中は息子たちが彼女の世話をし、その死後に財産を相続する（世話しない場合には相続分を失う）ことが定められ

(22) *SMEA 30-T 13* に関し、アルノーに従って Na^cmat-ili が PN（破損）の妻の娘＝養女になったと考える場合も、結局は同様に理解される。養女の場合、養親は将来的に彼女を家族／世帯構成員もしくは他家の者に嫁がせることになるが、この文書において *almattu-azibtu* 規定が付されたのは、この結婚が暗黙の前提となっているからである。

(23) Bazila が義務を終えた後は、債権者宅から退去し、*ašar libbišu lillik* 「自らの好む所へ行くべし」と記される（8, 36行）。この表現は女性（妻）に対しても適用可能な点（山田 2008, 183参照）を考慮すると、Abi-qiri の場合には行く先が決まっているので、その使用が回避されたのだと理解される。

(24) その事例に関し、山田 2008, 192 n. 10 参照。

る。

第二は、息子たちが相続する財産とは別に、妻に贈る「寡婦産」(*kubuddā⁽²⁵⁾u*)を定めておく場合である。その内容は、ほぼ全てが動産(家具、器具・用具類、衣類、男女の奴隷、家畜、大麦、銀)である。例外的にぶどう園が含まれる場合があるものの(*AuOr* 5-T 15: 10; *SMEA* 30-T 8: 14)、耕地が贈られることはない。これは、母の死後、それまで彼女の世話をしていた息子(たち)によって相続される。

自発的にせよ、これらの措置によって促されたにせよ、寡婦は息子たちによる世話を受けて余生を過ごす点で変わりはない。息子がいない場合には、当面の間、夫の親族の好意に依存して生きていく以外の方法はなかろう。その後の状況に関しては、(特に夫の親族から)養子を迎え彼に夫の財産を相続させたり、あるいは家から排除され自分の実家に返されるなど、いくつかの可能性が想定される。女奴隷として売却されるのは、最悪の事態であろう(cf. 下記注28)。

2. 離縁者の処遇

夫が妻を離縁する場合、妻の側に深刻な落ち度がない限り、ただ家から排除するという状況は古代においても考えがたい。当然、慰謝料の支払いが求められる。例えば「ハンムラビ法典」には、息子を産まなかった妻を夫が離縁する場合、彼女には花嫁料(*terhatum*)相当の銀を与え、彼女の持参財(*šeriktum*)を返却すべきこと(§ 138)、花嫁料が支払われていなかった場合には離婚料(*uzubbûm*)として銀1マヌーを支払うべきこと(§ 139)が定められている。さらに§ 141からは、妻の旅費(*harrānum*)も支払われることが示唆⁽²⁶⁾される。

エマル文書には離婚証書は確認されないが、*TS* 28 (H)に妻が夫(おそらく入り婿)を離縁した際の記録(18-23行)が残されているので、紹介しよう(翻訳のみ)。

¶IM-kimi は以下のように言った、「今、私は衣服1着、重さ300(シクル)の青銅製大鍋1個、銀10シクル、青銅製ハンマー、青銅製 *angurinnu*——これらの品々を私の夫 Milki-Dagan に与えた」と。彼は自分の(息子)¶IM-malikの手を取り、自らの好む所へ行くべし。彼の訴訟相手はいない。

費目の分類は不明ながら、たしかに慰謝料として動産の支払いがなされている。離縁された女性と同様、おそらく Milki-Dagan は(まず)自分の実家へ帰るのであろう。居心地の悪い生活が待っていようが、運が良ければ再婚の機会もあるかもしれない。

3. 自由人としての寡婦と離縁者

almattu-azibtu 規定が対象とする女性たちが受けるべき扱いとは、上記のごときものであろう。(孝行)息子がいない寡婦の場合は今後の生活が不安であるし、離縁者の場合は慰謝料を得たからといって生活の展望が開けるわけでもあるまい。しかし同規定において重要なのは、彼女たちの処遇の善し悪しではない。通常の寡婦や離縁者＝自由人女性と同様という点であると筆者は考える。

ここで *Emar* VI 16 (第4史料)において *almattu-azibtu* 規定が実質的に奴隷解放＝自由人化(実現)の

(25) その事例に関し、Pentiuc 2001, 107f. (s.v. *ku-bu-da*, etc.) 参照。なお、*BLMJE* 14: 13 と *SMEA* 30-T 8: 19 をこれに加える。

(26) これらのテキストに関し、Roth 1997², 107f.; 中田 2002², 39f. 参照。

(27) 原語 *naqqabu* に関し、Pentiuc 2001, 131f. (s.v. *na-qa-bu*) 参照。次の *angurinnu* に関しては *ibid.*, 25 (s.v. *a-gu-ri-in-nu*, etc.); Faist & Vita 2010 を参照。

規定として理解されたことを思い起こそう。「通常の…自由人女性と同様」とは、女奴隷ではないと言
い換えることができる。この点で興味深いのは、QVO 5-T 1（第1史料）において奴隷の妻とされた
Anna-kime のその後の運命である。既に注目しておいたように、実際に寡婦となった彼女は、亡き夫の
主人 Kuna'e の「娘」（QVO 5-T 2: 3）＝養女とされた。これは、家に留めておく彼女を女奴隷にはでき
ず自由人として扱わなければならないが、彼女に対する支配権をどう確保するか悩んだ Kuna'e の苦肉
の策であろう（cf. 山田 2012, 16）。このような Kuna'e の対応は、*almattu-azibtu* 規定が対象とする女性
の処遇に関し、同規定のもつ意図がその夫のみならず周囲の人間をも拘束する点をよく例証しており、
注目に値する。

同様の意図は *almattu-azibtu* 規定に関わる他の女性全員にも該当しよう。社会・経済的に劣位な立場
にある女性であるとはいえ、彼女たちは自由人であるのだから、しかるべく扱われるべきであり、身分
を変更し女奴隷として扱ってはならないことを、この規定は表明している⁽²⁸⁾のである。*almattu-azibtu* 規
定が積極的な意義をもつのは「自由人」という点においてであって、寡婦や離縁者自体ではない。両者
が言及されたのは、同規定が結婚を契機とする表現であるからにすぎない。

V. 補論：kīma mārāt Emar^{ki} šīt

結婚契約文書 RE 61 (S) には、*almattu-azibtu* 規定と同じ意図をもつと思われる別表現が認められる。
この文書についてはエマル市の慣習法を扱った旧稿で一度論じたが（山田 1997, 25f.）、その後新たな
知見も得られたので、改めてここで取り上げたい。

本史料はエマル人同士の間で行われた交換結婚を扱っている。まず Dagan-tariḥ の娘 Dagan-milki が
兄弟たちを証人として座らせた（1-2 行）後、本文部分は以下の通り：

(3) a-nu-um-^{ma} ^aha(sic)-la-mi-t[a] (4) DUMU.MÍ-ši a-^{na} a-^{hi}ha-mi-is (5) DUMU EN-lu-ka a-na
DAM-^{ut}-ti [Ø] (6) ta-an-din a-nu-um-ma ^{ma}a-^{hi}ha-mi-is (7) DUMU EN-lu-ka DUMU.MÍ-šu ^{na}ah-
mi-KUR (8) ^ana ^{da}gan-mi-il-ki (9) DUMU.MÍ ^{da}gan-ta-ri-iḥ (10) a-na É.GIA u DUMU.MÍ-ti (11)
ki-ma DUMU.MÍ.MEŠ e-^{mar}.KI (12) id-di-in-ši šum-ma (13) ^{ma}ia-ha-ni-DINGIR DUMU ri-x x [...]
(14) ^{na}ah-mi-KUR DUMU.MÍ [a-^{hi}ha-mi-is] (15) ⁱḥu-uz a-na UGU-[^{hi}ši] (16) ^{lik}-ru-ub ú-ul
[^u]-[na]- (17): ga-ar-ši ^{ki}-ma DUMU.MÍ [Ø] (18) URU.KI e-mar.KI ši-it šum-m[a] (19) ^{ma}a-^{hi}ha-mi-
is DUMU EN-l[u-ka] (20) ^{ah}-la-mi-ta DAM-šú-š[u] (21) iz-zi-ib-ši ki-ma DUMU.MÍ ^e-mar.KI (22)
ši-it iz-zi-ib-ši

今、彼女（Dagan-milki）は自分の娘 Ahlamit[u] を Belu-ka の息子 Aḥi-hamis に妻として与えた。今、
Belu-ka の息子 Aḥi-hamis は、自分の娘 Na^{mi}-šada を Dagan-tariḥ の娘 Dagan-milki に嫁および娘とし
て、エマル(市)の娘たち(に関する慣習)に従って与えた。もし Ri-X の息子 Yaḥanni-ili が [Aḥi-hamis]
の娘 Na^{mi}-šada を娶るならば、彼は[彼女の]ことを祝福すべし。彼は彼女を[誹]謗しない。彼女は

(28) ただし現実問題として、男女を問わず貧窮した自由人の生活を周囲の親族も経済的に支えきれない場合は多々
あったに違いない。そのような際には奴隷として売られたと思われるが、親が自分の子供を売却する場合（例：上
記 Emar VI 217）とは異なり、それは少なくとも法律上「自発的に」なされた。例えば TS 52 では、ある 2 人の兄
弟が姪を売った際、a-na 12 GÍN ^{KU}.BABBAR.[MEŠ] ŠAM.[TIL.LA] (6) iš-tu SAG.DU-ši-ma (7) a-na GÉME-ut-ti
it-ta-an-nu-ši 「(彼ら兄弟は)[全]額銀12シクルで、彼女(自ら)の意思によって（直訳：彼女の頭から）、女奴隷とし
て与えた」とある（cf. Arnaud 1992, 94f.）。実際の状況はともあれ、彼らの意思によるのではない。親族といえど
も、自由人を勝手に奴隷として売却できなかったのである。

エマル市の娘だからである。もし Bel[u-ka] の息子 Ahi-ḥamis が自[分]の妻 Ahlamitu を離縁するならば、彼女はエマル(市)の娘であるから、(それにふさわしい仕方で)彼女を離縁する。

注

16行：冒頭の文字の読みは、ハンドコピーに基づく筆者の提案。なお *lik* (=UR) は不可。Cf. 「e[?]」-ru-ub (Beckman 1996, 79)。文字 ŠID (=lak) を稀な音価 *lik* と読ませる点につき、シリア・ヒッタイト型文書における CaC 文字で /CiC/ 音を表す用法が参考となる：LAM/lam=*lim* (e.g., ul-tal-*lim* [Emar VI 21: 6]; Durand 1989, 177 参照), ŠAR/šar=*šir*₉ (um-te-š[*i*]r₉-ru- [TS 78: 2]; cf. 山田 2008, 196f. n. 44), UR/taš=*tēš* (tēš-pe-li-šu [Emar VI 257: 11])。シリア型文書では CVC 文字の使用自体が稀ながら、以下の類似した用例が認められる：DIM/*tim*=*tām* (ša-ni-tām-ma [Emar VI 185: 22]; Ikeda 1995, 272 参照), ZUR/šur=*šār* (e.g., šār-pi [Emar VI 138: 10]; ibid., 279 参照)。

16-17行：Cf. *u-ul* x [...] (17) *u-ta[!]-ar-ši* (Beckman, ibid.)。動詞の綴りが例外的に 2 行にわたるとする筆者の提案の根拠は、第一に否定辞 *ul* と動詞の間に期待される語がないこと、第二に動詞 D pres. 3.c.sg. の接頭辞 /u-/ は、通常 *u-* ではなく *u-* と書かれること、第三に17行冒頭の文字を Glossenkeil として理解しうることである。最後の点に関し、シリア型文書には通常の形——二重斜め棒 1 本 (TS 9: 7, 9-11, 13, 18, 19, 22, 25, 27, 46, 48 [12行には認められない]; 62: 39), Winkelhaken 2 本 (RE 86: 23, 27, 32)——以外に、斜め棒ないし Winkelhaken 1 本の Glossenkeil (インデントをとまう) が Emar VI 156: 8 (26行は疑問) と RE 20: 5a, 19a に認められる点に注意せよ。なお、筆者はここで動詞を *nugguru* (CAD N/2, 313a) ないし *nagāru* D (AHw, 710a [s.v. *nagāru*(m) II]) と取ったが、他の語 (例えば *nakāru* D) の可能性を排除しない。

結婚契約でありながら花嫁料への言及を欠くのは、これが交換結婚であるために相殺された結果であろう。筆者による15b-17a行の読解は仮説にとどまるが、文脈自体からも Yahanni-ili が妻である Na⁽²⁹⁾mi-šada に対し敬意を払い、優しくあるべしといった意味であることは疑いえない。男性中心的な社会にあっても、夫は妻に対して暴君であってはならないとの理想がここでは表明されている。妻を離縁することは無論可能ながら、妻 Ahlamitu に関して述べられているように、夫はしかるべき仕方(で)彼女を離縁しなければならない。何故なら、彼女はエマルの女性市民=自由人だからである。

しかしもし Na⁽³⁰⁾mi-šada と Ahlamitu の双方が普通のエマル人であったのなら、何故ことさらに彼女たちが「エマル(市)の娘」であること (17-18, 21行; cf. 11行) を強調する必要があるのだろうか。筆者にはいささか奇妙に思われる。

ここで Na⁽³⁰⁾mi-šada が「嫁および娘として」(10行)、すなわち結婚養女縁組という形で Dagan-milki に与えられた点に注目したい。既に RAI 47-T 2 (第 6 史料) に関して指摘したように、この種の契約を結ぶ花嫁側は経済的に困窮した自由人であったと推定される。Na⁽³⁰⁾mi-šada の父 Ahi-ḥamis が貧窮者であれば、彼と花嫁を交換した Dagan-milki もまた同様の境遇にあったことは容易に推測されよう。この点に関し、彼女の娘の名前 Ahlamitu (「アフラム人女性」の意) が注目される。「アフラム人」(Ahlamû) とは、アラム人と密接な関係をもつ牧羊民集団である。普通のエマル市民が自分の娘につける名前としては、全く不適当と言えよう。だとすれば Ahlamitu は、Dagan-milki (とその夫)の養女となったアフラム人、もしくはエマル在住のアフラム系家族の娘と考えられる。後者はもとより前者の場合にも(アフラム人以外にも養女候補はいたであろう)、Dagan-milki がエマル自由人社会の下層に属していた可能性は高い。彼らが交換結婚を行ったのは、そのままでは困難な花嫁料の支払いを回避するための妙案だったのかもしれない。

両家(特に Dagan-milki の家)の境遇に関する以上の推測が正しければ、18b-22行の離婚規定は、上

(29) おそらく Ri-X (当時既に死亡) とその妻 Dagan-milki の息子 (Beckman 1996, 80)。

(30) 12b-15a行の条件節は、Yahanni-ili が Na⁽³⁰⁾mi-šada を娶らない可能性を含意する (おそらく彼は当時まだ結婚適齢期に達していなかったのであろう)。その場合、テキストには明記されないが、Dagan-milki は彼女を他家へ嫁がせると考えるのが自然である。

記の *almattu-azibtu* 規定と実質的に同一と見なせよう。Ahi-ḥamis が Aḥlamitu を離縁する場合はしかるべく行う、すなわち他の(寡婦や)離縁者たちと同様に扱うということである。ならばそこで含意されている意図もまた同一と見なせるのではなからうか。

この点に関して興味深いのは、ヌジ文書 AASOR XVI 42 である。これは、Tulpun-naya なる女性の女奴隷 Ḥanate が Šukr-apu の娘 Ḥalb-abuša を「娘と嫁」として迎え、自らの好きなように彼女を嫁がせる権利を得たことを定めた結婚養女縁組契約 (*ṭuppi mārūtī u kallatūtī* [1 行]) である。この文書中、次の一節が注目される。

(20) *ù ḥa-na-te ḥal-bá-bu-ša* (21) *ša ki-i mārāt [a]r-ra-áp-he i-ṣ[u]-ša-aš-ši* (22) *a-na amtiⁱⁱ la ú-ta-ar-ši*

Ḥanate は Ḥalb-abuša を [ア]ラブハ(国)の娘として扱う。彼女(前者)は彼女(後者)を奴隷に変えてはならない。

女奴隷の「娘と嫁」になったといえども Ḥalb-abuša の身分は女性アラブハ国民＝自由人であり、彼女は女奴隷にされてはならないことを、この規定は述べている。このテキストに照らして RE 61: 18b-22 を見た場合、ここに Aḥlamitu が女奴隷として扱われてはならないとの意図を読みとることは容易であろう。

VI. おわりに

以上の検討に基づき、本稿冒頭に引用した筆者の見解は、一部修正を余儀なくされる。*almattu-azibtu* 規定が対象とする女性の中には元女奴隷も含まれるのであるから、「社会・経済的に劣位な立場に置かれた女性」と言わなければならない。この規定においては、そのような自由人女性が結婚する際に、その後夫に先立たれたり離縁された場合、通常の寡婦や離縁者たちと同様に扱われるべきことが直接的には定められている。しかしそこに込められているのは、彼女たちはあくまでも自由人であり、しかるべく扱う、換言すれば身分を変更し女奴隷として扱ってはならないという、より一般的な主張であると考えられる。

前稿(山田 2012)で扱った *amīlūtu* その他による「世話」契約(H)の場合にも観察されたように、*almattu-azibtu* 規定(H)には「自由人」と「奴隷」の明確な差別化への意思が認められる。ここで RE 61 (S)における表現 *kīma mārāt Emar^{ki} šīt* (21b-22a行)がこの規定と同様の意図をもつとする筆者の解釈が正しければ、両者に関する強烈な身分差意識は、表現形態こそ異なれ、シリア・ヒッタイト型文書とシリア型文書の双方で、すなわちエマル人全般の間で共有されていたとの結論が得られる。

債務を返済できない自由人が債務奴隷となり、逆に主人が自分の奴隷を随意に自由人として解放する事例は、エマル文書においてしばしば認められる。ここからは、エマルにおける自由人と奴隷の間の身分的障壁が比較的低く、双方向へ容易に越境可能であった状況を見てとることができる。こうした社会にあって *almattu-azibtu* 規定が逆に両者の峻別を要求している点は興味深い。この対照的な特徴は、同規定が社会的な異議申し立てとしての性格を帯びていたことを示唆しよう。そこに映し出されているのは、当時の身分秩序の動揺という現実に対し懸命な抵抗を試みたエマル人——特に劣位にあった自由人——の心の姿に他ならない、と筆者は考える。

参考文献

- Adamthwaite, M. R. 2001: *Late Hittite Emar: The Chronology, Synchronisms, and Socio-Political Aspects of a Late Bronze Age Fortress Town*, Ancient Near Eastern Studies, Supplement 8, Louvain.
- Arnaud, D. 1985-86: *Recherches au pays d'Ashtata. Emar* VI/1-3, Paris.
- Arnaud, D. 1987: "La Syrie du moyen-Euphrate sous le protectorat hittite: contrats de droit privé," *Aula Orientalis* 5, 211-241.
- Arnaud, D. 1991: *Textes syriens de l'âge du Bronze récent*, Aula Orientalis-Supplementa 1, Sabadell.
- Arnaud, D. 1992: "Tablettes de genres divers du moyen-Euphrate," *Studi Micenei ed Egeo-Anatolici* 30, 195-245.
- Arnaud, D. 1996: "Mariage et remariage des femmes chez les Syriens du moyen-Euphrate, à l'âge du Bronze récent d'après deux nouveaux documents," *Semitica* 46, 7-16, Pl. 1.
- Beckman, G. 1996: *Texts from the Vicinity of Emar in the Collection of Jonathan Rosen*, History of the Ancient Near East/ Monographs II, Padova.
- Belmonte Marín, J. A. 2001: *Die Orts- und Gewässernamen der Texte aus Syrien im 2. Jt. v. Chr.*, Rép. géogr. 12/2, Wiesbaden.
- Di Filippo, F. 2010: "Two Tablets from the Vicinity of Emar," in M. G. Biga & M. Liverani (eds.), *ana turri gimilli: studi dedicati al Padre Werner R. Mayer, S. J. da amici e allievi*, Quaderni di Vicino Oriente V, Roma, 105-115.
- Durand, J.-M. 1989: Review of Arnaud 1985-86, *RA* 83, 163-191.
- Durand, J.-M. & L. Marti 2003: "Chroniques du Moyen-Euphrate 2. Relecture de documents d'Ekalte, Émar et Tuttul," *RA* 97, 141-180.
- Faist, B. I. & J.-P. Vita 2010: "angurinnu," *NABU* 2010, 6-8 (no. 7).
- Grosz, K. 1987: "On Some Aspects of the Adoption of Women at Nuzi," in D. I. Owen & M. A. Morrison (eds.), *General Studies and Excavations at Nuzi* 9/1, SCCNH 2, Winona Lake, Ind., 131-152.
- Hallo, W. W. 2002: "Love and Marriage in Ashtata," in S. Parpola & R. M. Whiting (eds.), *Sex and Gender in the Ancient Near East* (=CRR 47), Helsinki, 203-216.
- Ikeda, J. 1995: "A Linguistic Analysis of the Akkadian Texts from Emar: Administrative Texts," Ph.D. Dissertation, Tel Aviv University.
- Justel, J. J. 2008: "L'adoption matrimoniale à Emar (Syrie, XIII^e s. av. J.-C.)," *Revue historique de droit français et étranger* 86, 1-19.
- Justel, J. J. 2009: "Prácticas jurídicas y estrategias familiares en el norte de Siria durante el Bronce Final (ss. XV-XII a. C.)," *Gerión* 27, 7-25.
- Pentiuc, E. J. 2001: *West Semitic Vocabulary in the Akkadian Texts from Emar*, HSS 49, Winona Lake, Ind.
- Pfeiffer, R. H. & E. A. Speiser 1936: *One Hundred New Selected Nuzi Texts*, AASOR XVI, New Haven.
- Roth, M. T. 1997²: *Law Collections from Mesopotamia and Asia Minor*, Writings from the Ancient World 6, Atlanta.
- Westbrook, R. 1988: *Old Babylonian Marriage Law*, AfO Beiheft 23, Horn.
- Westenholz, J. G. 2000: *Cuneiform Inscriptions in the Collection of the Bible Lands Museum Jerusalem: The Emar Tablets*, Cuneiform Monographs 13, Groningen.
- Yamada, M. 2007: "Was Zu-Ba'la, Son of Šurši, a Diviner of the Gods of Emar?" *UF* 39, 791-801.
- 中田一郎 2002²: 『ハンムラビ「法典」』リトン.
- 山田雅道 1997: 「*Kima āli*: エマル市の慣習法について」『オリエント』40/2, 18-33.
- 山田雅道 2008: 「エマル文書に見える財産相続権の剥奪: その象徴的行為表現について」『オリエント』51/1, 181-197.
- 山田雅道 2011: 「新たなエマル文書 QVO 5-T 2 について」『オリエント』54/2, 119-122.
- 山田雅道 2012: 「エマルにおける *amīlūtu* と「世話」契約: 奴隷, 養子, 債権者との比較から」『オリエント』55/1, 2-21.